

おわりに

まだ学生だった60年安保は別として、私が経験した大きな運動では、1970年安保の「6・23」のデモや1973年5月15日の「小選挙区制粉碎」の大デモなどの記憶があります。道路一杯に広がったフランスデモの高まりは、人々の団結と決意を示していました。しかし、今回の戦争法案反対、民主主義を取り戻せという運動はそうした動きを超え、今までよりもっと持続的で、芯の強い運動のように思えます。この運動では新しいことが生まれています。いろんな工夫がありました。みんな思い思いのプラカードを持って参加しました。金子兜太さんの「アベ政治を許さない」の手書きのポスターは日本中に広がりました。

この文章を書いている現在、安保法案の帰趨は分かりません。しかしとにかく、安倍内閣は何をおいても米国との約束の法案を成立させる構えです。法案が成立しても成立しなくても、日本の将来がそこで大きく動くことは確かです。法案が成立した場合、自衛隊の行動は拡大され、米国の戦争に参加する道が開かれるのは確かです。しかし、果たして具体的に何が起きたとき、国民はそれを許すのでしょうか。「違憲訴訟」も計画されています。何とか選挙で自民党を倒せないかという模索もあります。歴史はらせんを描いて進みます。「戦争の世紀」と呼ばれた20世紀は、「戦争違法化が進む世紀」でもありました。軍事力で平和を創ることができないことは、歴史が証明しています。

逆に、この法案が成立しなかった場合、日本の危険が増すか、そんなことはありません。私はむしろ、国民の平和への思いと、日本国憲法の大切さがあらためて確認され、日本を変えていく大きな力をつくることになるのではないかと思います。

米軍に寄り添って大きな軍事力と経済力で世界を睥へいげい睨する日本になるのか、それとも「戦争をしない国」を世界に宣言して世界をリードする外交力を発揮する日本になるのか。どちらが日本の将来にとって、日本人にとって幸せなのか。

ジャーナリストは、歴史のデッサンを描いている、と言ったのは、ワシントンポストの編集主幹だったベンジャミン・ブラッドリーです。戦後70年のいま、この本が2015年の日本のデッサンを少しでも描けていれば、うれしい限りです。

2015年8月14日

丸山 重威